

来年は自動車保険誕生100周年

なぜ、自動車保険に等級制度があるの？

来年は、自動車保険の誕生100周年のこと。主幹保険会社のプロモーションも盛んになってきました。

発売当時は、高額な自動車のための物保険、今の車両保険であったと研修生時代に教わりました。量産モデル型(フォード)のワンモデルでお馴染みの方も多いでしょう。でも50

0\$以上の価格ですから、国内の自動車保有1000万台程度でも十分保険は成立したのではないかと、思います。

その後、急速なモータリゼーションの中、約款も商品もニーズと共に改革を繰り返したことで、

この道40年を超える先輩からは、FAP(家庭用)やCAP(業務用)なる商品が、示談交渉サービス付の画期的な約款の改定であったことや、自賠責の死亡保障額が30万円であった(※今だと600万円位の換算でしようか)など、トリビアな(死語かな?)話も耳にしました。

脱線しますが、後の三徳円強奪事件が、高度経済成長以降とは言え、その被害額が如何に高額であったか、あらためて思い知らされます。

100年の歴史を経た自動車保険ですが、まだまだ不可解な矛盾を感じてしまうのは保険の特性なのではないでしょうか。

以前、お客様に「なぜ、

…ん。一期

「ほけん」「あんしん」「50音簡了の“ん”」

株式会社一期(いちご)保険事務所
代表取締役 石井 裕二
HP▶http://homepage2.nifty.com/ichigo/

私研修生の頃は、保険自由化一歩前のBAP・PAP・SAPが各社共通の商品で、白タリフを常に持ち歩いた時代です。すでに損害センターの支援体制も充実しており、不慣れな私でも安心して事故の処理ができました。

実際、自動車保険でも

自動車保険だけに等級制度があるのか?と、何気ない会話の中で質問されたことがあります。等級制度は、保険料の公平性を保つことが目的ですが、この返答はあえて控えることにしました。

お客様にとっては、火災保険も傷害保険も同じ分類であり、自動車保険だけが、その公平性を保つ制度が成立していることに矛盾を与えてしまいます。説明すればするほど墓穴を掘る結果を招く気がしたからです。

自動車保険よりも歴史の古い火災保険であれば、同じように等級制度が確立しているもおかしくはありません。

とは言え、第三者への賠償を柱とした自動車保険とは異なり、火災や傷害は被害への救済目的が強く、罹災やケガを被った上に、さらに保険料のアップでは酷な話です。

長年培ったノウハウ 重みと心強さを感じる

【歴史の中で】
年末はなぜか区切りにと、あれこれと整理をします。

昔使用していたツールやお客様へのレターサンプルなどが見つかること、短いながら代理店としての歴史を振り返る思いです。懐かしさと、その当時の想いもよみがえります。

独立当初は、かかってくる電話の対応に追われ、予定どおりに外出ができませんでした。「訪問の時間に遅れます」と、お詫びの一報を繰り返す有様を、なんとか解決しようと試行錯誤した当時

しかし、このような約款や規定のマニマックな書みの保険請求は、事説明では、お客様の求める回答とは違う気がします。

【ツールや案内レターが、弊社のICHIIGO SYSTEM(業務システム)の原点であったことは確かなようです。今では随分と様変わりして、かかってくる電話は数本。自らの主導で業務ができるようになりました。改善しようとする意識こそ、業務のスタイルを変えていくことができた、昔のツールが教えてくれます。

さて、冒頭の自動車保険誕生100周年のプロモーションは、個人的にお気に入りです。広告にありがちな美辞麗句ではなく、イメージもコピーも重厚感があり、歴史の中で培ったノウハウほど誰かに見られているという気持ちで、身だしなみ、たたずまい、振る舞いをためて感じさせられます。

(講師の先生の言葉)

営業認可の1914年(大正3年)2月14日は、勢が保険マンとしてお客様に安心を与える一つに、なるの言うまでもないことかと思えます。

ちなみに、マナーとはも加わり良い塩梅なのでエチケット十心配のぞきではないかと…。

では皆さま、新たな歴史を築く良いお年をお迎えください。

第一印象は6秒で決まる

家を出たら見られている意識を

みなさんこんにちは。ドリームパートナーズの藤本です。今年も残すところ後2週間余り。本当に早いですね。さて先日、話し方講座なるセミナーを企画し受講いたしました。

少人数でしたが大変ためになるセミナーで今後の営業活動に生かしていければと思います。

その中で講師の先生がおっしゃった「第一印象は6秒で決まる」という言葉がとても印象に残っています。視覚(見た目)55%、聴覚(声色、トーン)38%、内容(話の中)

第一印象ってどこから始まるか、会った瞬間からと思われる方が大半かと思えますが、実はどこで見られているかわかりません。

ともあるかもしれないですね。そんな時、万が一が悪かったらどうしたら、もう第一印象は決まっています。

「家を出たら常に

27

株式会社ドリームパートナーズ
代表取締役 藤本 准一
【HP】http://www.dream-p.jp

現代人のカルテ

知っておきたい「病」の話

社会医学環境衛生研究所所長 谷 康平

274

徳洲会・猪瀬事件の真相は？

医療の世界と政治を巡る大事件が起ころうとしている。今、大騒動になって選出されたといえ自民党、財務省など主流派から突き放されてしまった結果といえます。

さらに徳田毅衆議院議員から5000万円を寄与されたことを日本医師会や厚生労働省が把握したことで「徳洲会・猪瀬事件」が表面化したという訳です。彼の後釜として700万票が期待される「反原発」の元総理の名前が浮上してきています。日本医師会に對立し続けていた徳洲会から徳田ファミリーを追放の後、国より前にしやしやり出てきた猪瀬氏が処分のことでは昨年12月に猪瀬氏がお金を受け取った時点で決定事項であったかのよう思えてくるほどの展開ではないでしょうか。

さて、平成25年12月6日(国会)で、ある法案に

対し「賛成120対0」の換点として、長く歴史に残る日になるかもしれない。例の「特定秘密保護法」が参議院で確立してしまいました。平成24年12月16日の衆院選で自由民主党に一票を投じた人たちの多くは平成21年9月以降の民主党政権の不甲斐なき経済政策の稚拙さに対して「NO」であったにすぎず、全てを自民党に任せただけで手放したはずなんです。

何と言っても55年体制の制度疲労が極限に達し、民主党が3年で何も解決できないほど大混乱状態にあったがゆえに「政権交代」選挙で綱領のない民主党に「ハンドルの持たせられたのではなかったでしょうか。

民主党なら大スキャンダルになるようなケースでもマスメディアは自民党では見過ごして今年7月の参議院選挙では自民党が大勝して「本当はねじれている方が健全」な国会運営が何の抵抗もなしに何でもOK状態になってしまいました。そして、私たちが自民党に期待していた経済政策よりも突然ふっつわいたような「特定秘密保護法」成立などが中心の国会となつてしまったのです。

イスラエルでは1200人で構成されるクキセト(国会)で、ある法案に

医療の世界と政治を巡るスキャンダル発生

猪瀬氏はしらぬまに外

平成26年が良い年になりま